

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：32303

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22730722

研究課題名(和文)口唇裂口蓋裂児の心理社会的発達についての縦断的研究 - 養育者との関係性を中心に -

研究課題名(英文)Longitudinal study of psycho-social development of infant with cleft lip/palatte

研究代表者

松本 学 (Matsumoto, Manabu)

共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・准教授

研究者番号：20507959

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では口唇裂口蓋裂(Cleft Lip and /or Palatte,以下【CL/CP】)児や家族に対する早期支援開発の基礎的知見を得るため、生後まもなくから生後1歳半までのCL/CP児とその母親についての特性や両者の関係性と疾患・治療との影響関係についての縦断的調査を行った。母親に対する抑うつ得点(BDI-2による)の結果からは生後3ヶ月時点よりも生後6ヶ月時点の方が母親の心理的状态は改善していることが見て取れた。支援においては、とりわけ出産後から半年にかけて、複数診療科連携の下での医療・心理両面での支援がなされることが必要であると提言された。

研究成果の概要(英文)：This is the research for the psychological impact of infants' and their mothers' traits and their relationships under the stresses of knowing infants' symptoms and medical intervention for cleft lip and/ or palate. The Mothers' scores of depression (BDI-2) showed that mothers psychological distresses were decreased at 6months from the birth compared to 3 months. It is suggested that When the psychological support in this area, medical and psychological support under the cooperation of cleft-related section in the hospital is needed.

研究分野：特別支援教育

科研費の分科・細目：疾患・病気療養

キーワード：疾患・病気療養 親子関係 心理学的支援 縦断的研究 口唇裂口蓋裂

1. 研究開始当初の背景

- (1) 口唇裂口蓋裂(Cleft lip and/or palate【以下 CL/CP】)は出生時に顎顔面部・口蓋部に可視的変形が認められ、哺乳・嚥下障害、時に呼吸障害が発現する頭蓋顎顔面部で最も発生率の高い先天異常であり、その発生率はおよそ600人に1人である(茅野他,2004)。CL/CPは裂が認められる範囲によって口唇裂・口蓋裂・口唇口蓋裂の3型に分類され、いずれの類型でも、機能回復・可視的変形の改善のために生後まもなくから発育期全般にわたって、口唇・口蓋形成手術、歯科矯正治療、言語治療等の複合的治療が形成・耳鼻咽喉・歯科等の複数診療科において、厳密な日程で実施される(幸地,2004)。加えて、治療が可能な病院は都市部の総合病院に限定されるため、都市部以外の患者・家族は長時間・長距離の定期的通院を多いときで月に1回以上、求められることとなる。このように患児・家族は、出生から成人期に至るまで長期的にわたり、障害・治療に関わる心理的・身体的ストレス、通入院の時間的経済的負担等、多様なストレスにさらされ続ける。特に出生～1歳頃までは、CL/CP告知・口唇形成術(生後3ヶ月頃)・口蓋形成術(1歳頃)・特殊な授乳、可視的変形へのショック(松本,2008)・抑うつ(足立・幸地,2008)が見られ、こうした要因が養育者の養育動機づけや患児を生んだことの罪障感、育児展望に影響を与え、患児との関係性にも大きな影響を与えることが予想された。そしてこうした高ストレス下で乳幼児期を送ることは、患児のその後の心理社会的発達に大きな影響を及ぼすと考えられた(松本,2008; Speltz, et al., 1995)。
- (2) しかし、CL/CP児とその家族が特異な環境に置かれ、心理社会的発達への影響にも言及されているにもかかわらず、患児とその家族の発達早期からの心理状態やその関係性の実態解明・早期支援の試みはほとんど行われていなかった。先行研究では、発達早期からの調査の重要性を主張しているグループが、口蓋裂児と口唇口蓋裂児、健常児の三群について生後3ヶ月の患児の気質や魅力、母親の育児ストレス属性や家族環境と12ヶ月での母子愛着傾向の関連を見ている研究があるが(Speltz et al, 1997)、出産から3ヶ月までからの発達早期で経験するはずの多様なストレスの影響について十分に掬えているとは言い切れない。この問題を克服するためには、出生からできるだけ早い時期からの縦断的調査が必要不可欠であると考えられた。

2. 研究の目的

- (1) そこで本研究では、CL/CP児や家族に対する早期支援開発につなげるための基

礎的知見を得るため、発達のごく早期段階の特異な高ストレス条件下で、CL/CP児がどのような心理社会的発達をたどり、発達にどのような特異性があるのか、またこの特異性によって母子の心的状態や関係性がどのような影響をうけ、それが患児の発達にどのような影響を及ぼしているか、について明らかにしたいと考えた。

- (2) このため、必要に応じて心理専門職による心理的支援を行ないながら、CL/CP児の出生から1歳までの期間におけるCL/CP児や母親の心理的特性、児と養育者との関係性、家族環境、養育者・家族のCL/CP経験の意味づけといった多元的な指標を用いた縦断的調査を実施した。そして、この調査をもとにして、CL/CP児の乳児期の心理社会的発達について総合的考察とモデル生成を行なったうえで、彼らに対する適切な早期支援プログラムについての提言を行うことを目指した。

3. 研究の方法

- (1) 東北大学病院で通院・治療を受けているCL/CP児(口蓋裂群・口唇裂群・口唇裂口蓋裂群)とその母親/家族に対して、多様なストレスが患児母子の関係性に与える影響を中心に生後出生～3・6・12・18ヶ月齢の3時点での縦断的研究を行なった。
- (2) 依頼に当たっては、東北大学大学院歯学研究科研究倫理専門委員会の所定の手続を経て、大学病院内にて協力者母子及びその家族に研究の承認を得て行なった。
- (3) 研究は、対象児と母親の自由遊び場面における観察、CL/CP児の母親に対する質問紙調査、母親とその家族への面接調査から構成され、大学病院内にて研究代表者と研究協力者によって遂行された。

4. 研究成果

- (1) 2013年2月までに東北大学病院顎口腔機能治療部(唇顎口蓋裂センター)を受診したCL/CP児(男児31名、女子24名)とその母親51組に対して研究について承諾を得、調査を行った。母親に対する抑うつ得点(BDI-2による)の結果からは生後3ヶ月時点よりも生後6ヶ月時点の方が母親の心理的状态は改善していることが見て取れた。こうした結果は先行研究においても報告されているが、あくまで後方視的調査で報告されるのみであり、本研究のような前方視的調査でも報告されたことは、生態学的妥当性の観点から意味のある結果である。
- (2) (1)の結果で見られたようにうつ傾向を高める要因として、半構造化面接の結果から検討した結果、その要因の一つは出産とその前後の状況であった。特に治療や養育についての情報が関係しているよ

- うに思われた。例えば、疾患についての知識がない・または少ない場合には、生後 CL/CP の告知を受けた場合に、医療職の一連の説明を受けても十分には理解できない事例があるように見受けられた。
- (3) こうした事例にたいするケアとして、とりわけ出産後から半年にかけて、複数診療科において医療職からの丁寧で根気強い複数回にわたる説明を続けることが寄与することが考えられた。さらには調査面接に合わせて、心理職が患者母子の不安に感じるところを聞き取って、養育や治療に関する不安について分けた上で、センター内で連携して支援が実施された。なお、その際の心理職の手がかりとして、外来では口蓋裂学会発行の治療に関する手引き書を配布しているが、それに加えて新たに出産後まもない CL/CP 児の両親のために 3 つ折りのパンフレットを作成し、配布することで、両親が必要な情報にアクセスしやすいような工夫を行った。
- (4) 一方、母親の早期の抑うつ傾向に関しては、一部の母親においては CL/CP 児の出産とは関係なく、何らかの原因で母親のともも持っている抑うつ傾向が維持されている可能性も考えられた。調査では生後 3 ヶ月時点で抑うつ傾向が見られた母親は生後 6 ヶ月時点においてもその傾向を維持していた。このことから、生後 1 年以内の母親において高い心理的ストレスが見られる事例は、CL/CP 児の出産にかかわらず、ともも何らかの心理学的なリスクを有していることが考えられた。また、こうした抑うつ傾向を呈する母親のうち、特に抑うつ得点が高く、育児に影響を与える可能性が考えられる事例については、本人の了解が得て必要な支援を紹介するなどしてそのケアに努めた。
- (5) なお、辞退事例の多さについても今後の検討が必要であるように思われた。2014 年 6 月現在、1 歳半までの調査を完了できた事例は 4 9 組（口唇裂口蓋裂乳児母子 2 2 組、口唇裂児母子 1 3 組、口蓋裂児母子 1 2 組）であったが、このうち調査協力を得られなかったり、多忙などの理由で途中脱落したりした辞退事例は 4 0 組であるが、こうした辞退事例の中には、その後の治療において心理学的ケアを要する母子が散見された。このことから、調査研究依頼において、心理学的なアプローチを忌避する事例の中に、何らかのハイリスク要因の有する事例が存在する可能性は否定できない。今後の心理学的支援に際しては、調査とは別の文脈で心理学的支援を提供することが必要であるように思われた。
- (6) さらに超音波検査による出生前診断の影響についても本調査研究の中で無視できない要因として浮かび上がってきた。今回の調査中、児の出産前に出生前診断を受けることによって我が子の CL/CP が判明し、告知を受けている母親は全研究協力者の 27.9% に上った。この数字は我が国における他の報告(中新ら、2002; 足立・幸地、2008)の 7% と比較して高くなっているが、欧米圏の研究のレビューではやはり Jones(2002) の報告した数値(14-25%)と近く、我が国に多いても近年この領域における出生前診断やその告知が上昇傾向にあることが明らかになった。このため、今後は出生前診断が母親・家族に与える心理学的影響、さらにはそれが出産後の母子関係に与える影響について検討を行う必要があるように思われた。
- (7) なお、本研究の結果について、今後の解釈に当たっては、2011 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災の甚大な影響を十分に考慮する必要があると考えられる。実際に本研究に協力をいただいた母子の中に震災の影響で一時的に自宅を離れ、仮設住宅にすんでいた方や、遠方に避難されることで他院に転院された方もある。今回の分析では、こうした事例については、検討の際に震災の影響を考慮した上で、分析に加えている(転院などでデータがとれない事例については辞退事例とした)。
- (8) 実践上の成果としては、一連の研究の結果として、東北大学病院唇裂口蓋裂センター内で、心理と形成外科・歯科・看護などの各専門領域との連携が図られることとなった。具体的にはセンター主催で月に 1 回開催される症例検討会に心理職も参加することとなった。
- (9) また、2014 年度には形成外科内に唇裂心理外来が設置され、診療の一環として出生前診断直後から、あるいは出産後まもなくから口唇裂口蓋裂乳児とその母親・家族に対する心理学的支援を実施する体制ができあがりつつある。先に述べた辞退事例の多さやその中に見られる心理学的支援ニーズについてもこうした新たな枠組みの中でケアの可能性を探ればよいと考えられる。いずれにしても、今後この時期の丁寧な心理学的支援を構築することが課題となるだろう。
- (10) 最後に、今回の調査では当初目指した CL/CP 児の出生から 1 歳までの期間における CL/CP 児や母親の心理的特性、児と養育者との関係性、家族環境、養育者・家族の CL/CP 経験の意味づけといった多元的な指標を用いた縦断的調査に基づく心理社会的発達への解明を目指したが、そこまでたどり着くことはできなかった。ただし、経験的にはあるが、彼らに対する適切な早期支援プログラムについての一定の提言については行っていると考える。今後もまだ十分に分析ができてい

ないデータについて解析を行い、知見を  
発表しながらよりよい支援の構築を目指  
していきたいと考える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に  
は下線)

##### [雑誌論文](計4件)

松本学: "可視的変形を有する人々に対  
する他者の反応-啓発用ポスターを用い  
て-" 共愛学園前橋国際大学論集 11、  
109-116. (2011)

<http://www.kyoai.ac.jp/college/ronshuu/no-11/matsumoto.pdf>

松本学・伊藤匡: "調査研究の熟達化を探  
る~病気・障害領域の面接調査を中心に"  
創価大学教育学論集, 63, 99-109 (2012)

松本学・中條哲・幸地省子・足立智昭・  
遠藤利彦: 先天性疾患が出産後の母親に  
与える心理的影響: 口唇裂・口蓋裂乳児  
の母親における抑うつ得点の2.2点間比  
較 共愛学園前橋国際大学研究紀要、  
101-109. (2013)

<http://www.kyoai.ac.jp/college/ronshuu/no-13/2013-matsumoto.pdf>

川島大輔・松本学: 自己の発達 小児内科  
特集「クローズアップ子どもの心の発達」  
(2013)

##### [学会発表](計10件)

松本学・幸地省子・足立智昭・遠藤利彦:  
"口唇裂初回手術前における母親の子ども  
も表象: 生後1-3ヶ月の母親の語りから"  
日本発達心理学会. 東京学芸大学, 2011.

松本学: "口唇裂口蓋裂者の自己の意味  
づけの変化プロセス(ラウンドテーブル:  
発達における変化プロセスの検討)" 日  
本発達心理学会. 東京学芸大学, 2011.

Manabu MATSUMOTO, Shoko KOCHT, Tomoaki  
ADACHI, Toshihiko ENDO: "Continuity  
and change of mother's representation  
of infant with cleft lip and or palate:  
from birth to 6month" European  
Congress of Developmental Psychology.  
Belgen, Norway, 2011.

松本学・中條哲・幸地省子・足立智昭: "  
口唇裂初回手術前後の口唇裂・口蓋裂乳  
児の母親の心理的苦痛" 口蓋裂学会.  
朱鷺メッセ(新潟市), 2011.

伊藤匡・松本学: "長研究の熟達化を探  
る-病気・障害領域の面接調査を中心に-"  
日本教育心理学会総会発表論文集、53、  
253. かでる2・7(札幌市), 2011.

松本学: 先天性疾患患者として生きること  
の意味づけは以下にして形成されるか、  
日本心理学会第76回大会ワークショップ  
「発達における変化プロセスと創発の  
検討」、専修大学、2012.

松本学・中條哲・幸地省子・足立智昭・

遠藤利彦: 先天性疾患が出産後の母親の  
心理的状态に与える影響: 生後3ヶ月と  
6ヶ月の2点間における母親の抑うつ得  
点についての比較、第24回日本発達心理  
学会、明治学院大学、2013.

Manabu MATSUMOTO, Shoko KOCHT, Tomoaki  
ADACHI, Toshihiko ENDO: Psychological  
conditions of infant with cleft lip  
and/or palate during first 6months  
from birth. 16<sup>th</sup> European Conference on  
Developmental Psychology, University  
of Lausanne, 2013.

松本学: 口唇裂・口蓋裂乳児の母親支援、  
臨床発達心理司会群馬支部研修会、高崎  
健康福祉大学、2014.

松本学: 口唇裂・口蓋裂乳児の母親・母子  
関係の心理学的支援、東北大学病院看護  
部講演、2014.

##### [図書](計1件)

松本学: マイノリティであること(日本発達  
心理学会編、発達心理学事典、丸善出版、  
2013.)

##### [その他]

保護者向けパンフレット作成

(「生まれて間もないCLP児のご両親のため  
に」)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

松本学 (MATSUMOTO, Manabu)

共愛学園前橋国際大学・国際社会学部・准  
教授

研究者番号: 20507959